NEWS Kio FD+

2010年 12月号

発行日　2010年12月1日

編集部　高等教育支援センター

特集：FD・SD 研修会報告

「畿央大学生の身につけさせたい教養とは」

はじめに

畿央大学では社会に出てすぐに役立つ実学を教育することを大きな目標にしている。学生たちも早く一人前になりたい気持ちで勉学に励んでいるし、それが大きなモチベーションになっている。また、カリキュラムもその方向で編成されている。

一方、建学の精神、「徳をのばす、知をみがく、美をつくる」はまさに教養豊かな人間の育成を目標としたものである。この両者をどのように両立させていくかが大きな課題であり、難しい要求である。今年度から教務委員会の専門部会として教養教育専門部会が活動を開始した。来年度からのカリキュラム改善をめざし会議を重ねているが、その席上でも本学の学生に身につけさせたい教養は何であろうかとの議論が進められている。今年度の FD・SD 研修会ではこの問題を全学の教職員で考えていただきたいと考えこのテーマを取り上げた。

さて、教養とは一体何であろうか。私は「社会の中で生きていく上で必要な知識・技術。自分の社会の中における位置づけ。判断基準である」と考えている。具体的には

1. **法律**（他人とのかかわりの中で社会生活が円滑に行われるための社会の中の約束事。およびそれが必要になった背景。）
2. **経済**（生産、流通、消費など）
3. **歴史**（技術革新があって生活の様相は変化するが、人間本来の考え方は時代を超えて残る。過去の人間の考え方、行動様式を知ることは自分の行動の方向性を決めるうえで非常に参考になる）
4. **言語**（外国語を含む）（グローバル化の時代を生きるために、異文化と関わり合い、互いに理解し合うためには言語は最低限必要なもの）
5. **文化、芸術**（生活を豊かにする源泉）
6. **政治、宗教**
7. **そしてこれらを統合・総合する能力**（これらの知識をバラバラなものではなく、互いの関係を理解して自分が生きていく指針とする）

などが考えられる。

それでは教養を教える場はどこであろうか。幼少時には家庭がその中心であろう。少し成長したのちには地域社会や学校が教養教育の場になる。大学の果たす役割は？それがこの研修会の課題であり、以下、各グループのリポートをここにまとめさせていただいた。この研修会に参加され、真剣に議論された教職員の皆様に心より感謝する。

健康科学部長、FD 推進委員会委員長　金子章道

＜CONTENTS＞

はじめに……1
科学的教養について……2
経済的教養について……3
哲学・心理学的教養について……4
文化・芸術的教養について……4
言語的教養について……5
歴史的教養について……6
本学における教養教育のあり方……7
お知らせ……12

9 月 16 日に開催された FD･SD 研修会では、金子、白石両学部長からの問題提起を受けて 6 班に分かれて討議し、全体会で討議結果を報告しました。最後のまとめでは、金子先生より「豊かな討議の内容を本学の教養教育の検討に役立てたい」そして、「全体の議論をまとめると教職員が高い教養を身につけ、学生に伝えていくことが大切」とのお話をいただきました。なお、白石先生には、問題提起にあたり、くわしい資料をご用意いただきました。加筆頂いたものを巻末にご紹介させていただきます。

第 1 班　　科学的教養について　　*theme*

【議事要旨（内容）】

― 畿央大学生に身につけさせたい教養について「科学」分野からの討議を行った ―

・最近の学生は「知識」は身につけているが、「常識」に欠ける。

・一見「ムダ」と思えるのが教養であり、そのムダを沢山学ぶことが人としての教養になる。

・情報や科学に行きつくまでのものが「教養」であり、本来は高校までに身につけておくべきもの。

・理系だからこそ、人文系の知識を身につけさせることが必要。

・「人文・社会・自然」全てを科学をと捉え、それぞれの科学では考え方・対応の仕方が異なる。色んな考え方を身につける観点からも「人文・社会・自然」各科学を重用視すべきではないか。

・専門科目から逆算、卒業から逆算、ミクロからマクロを捉えると、必要な教養科目が見えてくる。

・創設当時から「心理学」を軸として、カリキュラムを編成してきたが、専門科目の急増から教養科目が軽視されるようになってきた。

・教養科目を軽視することで、「専門学校化」してきている。普段の学びと「真逆」のことを教えることが、「人間力」の形成つながる。

・小規模な大学なので、物理的に教養科目を増加させることには無理が生じる（教室、経費、受講生数等）。

・受講生数の見込める科目に設定が偏りがち。

・キャリア科目が誕生して、教養との位置づけが難しくなってきており、座学よりもフィールドワークのニーズが高くなってきている。「教える授業」が少なくなってきている。それで良いのだろうか。

・科目名が教えるべき内容より、学生が興味を持ちそうな名称になりがち。

・１５回の授業を２つのテーマで分割するような考えも重要で、これで教養科目設定を２倍に増やせる。

・１００名以上の講義は無くすべき。

・ベーシックセミナー的な少人数で全ての教員が関わるような教養科目設定が良いのでは。

・看護医療学科だけ教養科目の必修が多い。学生本人のモチベーションを考えれば，教養科目は基本的に選択にすべきである。

・学生にわかりやすく教えることもよいが，難しい内容を難しく教える教員も必要ではないか。自分で考えてこそ教養が身につく

のであり，教えてもらっていては教養は身につかない。
・教養科目を「主題」と細分化した「副主題」に分野分けをして選択しやすいようにする。
・「主題」の設定のしかたで、教養科目に対する考え方が反映される。

＜合意＞

・建学の精神「徳知美」を教養教育の入り口として捉え、それを全面に出した教養科目の編成をすべきである。

・「教え」には、「思考・表現」と「技術・スキル」という側面が存在するがお互いに支えあうものである。
・看護や理学療法は新しい分野なので、「思考・表現」という考えが薄く、「技術・スキル」に傾斜しがち。

＜合意＞

・「技術・スキル」は目に見えやすく、成果も計りやすいが、専門学校との違いを明確にするためにも、「思考・表現」の考えを身につけさせることが重要。

（両側面の例）

	数学の場合	情報の場合	ｷｬﾘｱの場合	（教えの基本）	お互いが支えあう関係
思考・表現	論理の美	情報科学	キャリア教育	Know　Why	
技術・スキル	計算	情報処理演習	キャリア支援	Know　How	

第 2 班　　経済的教養について　　*theme*

2 班のテーマは「経済的教養」ということであった。冬木班長がグローバリゼーションの問題等、知っておくべき内容について、何点か例をあげ、「学生の身につけさせたい経済的教養」について順番に発言を求めたが、年長者の発言をきっかけにしだいに自由発言に移行した。

1．(1) 高校以下で行われている経済ゲームなどを本学学生にもやらせてはどうか、(2) 「くらしと経済」で仮想投資をさせ、期末に結果を発表させてはどうか、など、現在の科目の内容についての提案がいくつか出された。

2．身近なところから振り返る、ということでは、(1) 自分の学費の原資がどのように作られているのか、家の年収と支出、その中に占める自分の学費の重みをきちんと認識させる課題をやらせるべきではないか、という提案に一同うなずき、(2) 1 コマ 1800 円の授業料を払っていることを自覚させ、今日はその元手にふさわしい何かを得たか振り返らせる、という案は、教員自身が一コマごとに払う値打ちがある何を提供できたかを問われることになるので、賛意と半ば苦笑をもって受け止められた。

話はしだいにそもそも教養とは何か、という原点に向かい、20 世紀初頭には確立された「教養論」での理解を共有し、

・常識は最低限の教養
・当たり前、を疑う力が大学生の最低の教養
・社会のあり方全体を関連づけて理解する
・本質を身につけること
・見せびらかしの知識ではなく、理解が生き方の変更につながる実践力(伝統的教養論)をともなうこと

などが基本、ということで一同納得。

これらは、結局のところ『人間力』をきたえる、というべきものであると総括。

具体的には、個々の教員がそれぞれ工夫して教育に当たっていることはわかったが、一人の努力では追いつかないところを、科目間の連携を工夫して、学生の

力として確実に定着するようにできないだろうか、という方向性が提起された。特に、当たり前を疑う、とか、人に考えを伝える力、というものは、卒業論文・卒業研究の段階でみっちり指導し、力もつくが、これは大学での学びの前提なので、入学前後の集中教育で、表現力・文章力を鍛える必要がある。理想の学生が入学しているわけではないので、力量不足を前提にした授業の工夫がまだあるはずだし、しなければならない、という結論になった。

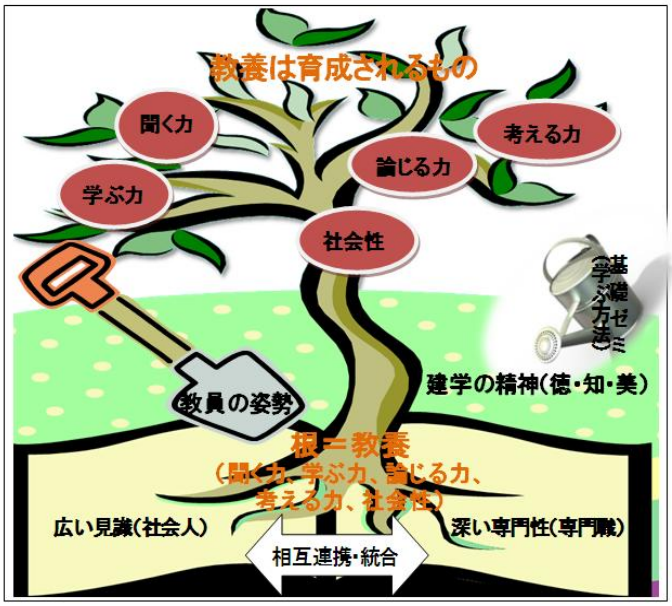
第３班　　哲学･心理学的教養について　theme

３班は「畿央大学生の身につけさせたい教養とは―哲学・心理学編―」のテーマを与えられたが、議論を開始する前に、教養とは何か？教員それぞれが有する教養観が異なるので、まずは教養とは何かを議論する必要があるのではないかと、森先生からご提案を頂き、その方向で議論を進めていった。いざ議論がはじまると、各先生方の教養観や教育観が活発に、熱く語られ、与えられた時間があっと言う間に過ぎてしまった。

最終的に我が班では、「教養とは何か？畿央大学生の教養を育成するには？」について議論を深めていった。議論の中でメンバー皆が「教養は、教えられるものではなく、育成されるものである」との見解を持ち、「社会人」として必要な基本的な広い見識と「専門職」として必要な深い専門性の育成を目指し、教養教育（科目）と専門教育（科目）、の連携・統合が必要であるとの見解に至った。人として社会人として専門職として卒業後も大きく成長するために、教養は必要であり、学生を木に例えれば、教養は根に相当する。社会に出れば嵐にもあうが、木が倒れないようにするためには深く太い根が必要である。根の力として、「学ぶ力」「論じる力」「考える力」「聞く力」「社会性」が重要になる。これら５つの根がしっかりしていると、土壌の「建学の精神」から多くの養分を吸い取ることができ、さらに将来、これらの５つは美しく開花するであろう。

では、このような大木を育成するため、教員に求められることは何かについても、活発な意見交換がなされた。議論の中で、庄本先生が徳との関連から東洋思想について言及され、先生の教養深さに感嘆したとともに、まずは教員自身が教養を身につけ、学生に伝えたい熱い思いを持つこと、「教員の姿勢」が重要であるとの結論に達した。最後に森先生の、学生は「教員の背中を見て育つ」とのご発言にメンバー皆がうなずいて議論は終了した。

発表会では、以下のような木の絵のポスターを用いて発表した。発表者の深田先生は素晴らしいプレゼンテーションで、ユーモアたっぷりに発表して下さった。



第４班　　文化･芸術的教養について　theme

４班は、教養としての文化・芸術を学ばせる上で、何が必要で、どう教えていく必要があるかということについて話し合いました。

教養としての文化･芸術を学ぶには、「本物」に触れ・

知り・感じる経験そのものが必要ではないかという提案がありました。例えば、文化財やお寺などにある建築物を実際に見て感じる、様々な現場体験談を聞いて感じる、リアルな経験をして感じるということです。一方で、今の学生がそれらの経験を「へぇ～」だけで終わらせてしまうことが問題だ、という意見も出されました。つまり、学生は触れ・知るだけで納得してしまい、文化・芸術を生成し紡いできた人の背景にある思想・社会・歴史、生活環境などについて、興味をもって考える段階までいかないということです。

どうして学生たちはそういうことに興味を持てないのだろう？ 学生が興味を持てるようにするにはどういう支援が必要だろう？ 私たちは知恵を出し合いました。こういうことは「感じなさい」、「興味を持ちなさい」と言ってもできるものではありません。そこで、先人の知恵や思想にとにかく触れる大切さを学生に伝える。また専門家として「本物になった」教員自身が、自分が辿った歴史や培ってきた教養について語る。あるいは、異文化に接する機会をつくり自文化・自己への気づきを促す。科目数を増やして選択肢を広げ、一般教養と専門のかかわりを示したカリキュラムを示して学生の興味を促す（現状は、少ない選択肢から単位取得のために受講している）等、様々な意見が出されました。以上のような意見は、文化・芸術に限らず、教養教育全般の改善につながるものだということが確認されました。

今回の機会を通して「みんなでいっしょに学生を育てているんだ」という実感がわき、教職員同士の連帯感が生まれました。学生に教養を身につけさせたいという思いに溢れる熱い時間になりました。

第５班　　言語的教養について　　*theme*

第５班は「言語」にかかわる教養をどう育成するかが課題である。まとめ役の伊藤先生からの導入「コミュニケーションとは言葉は 30%程度。70%はボディーランゲージ。非言語も広く解釈して「言葉」と考えてよい」に応え、一人一人の言語教育のイメージを話し合った。話題の中心になったのは人間にとって、「言語」がどのような機能を持っているかということである。

例えば、他者とのコミュニケーションツールとしての言語では、相手の立場に立ち相手に伝える表現力、相手側から考えを吸収するための分析力、に加えてグローバル社会を生き抜くための外国語が必要であるが、それらを深化させるのは非言語的なコミュニケーションである。しかしながら、　人間関係を踏まえた基本的な言語能力にも乏しい実態もある。

一般教養と専門教養を結びつける言語としては、問題意識から知識を得ようとする過程が大学では必要なのにも関わらず、採用対策などでどうしても言語習得が記憶型になりが

ちであり、社会に出て専門家としての言語力を身に付けるためには、教養と専門科目を結びつける指導の工夫も必要である。

こうした討議が進む中で導き出されてきたことは、言語は教養全体を結び繋げる基礎的教養であるということである。言語には他者とのコミュニケーションツールであると同時に。自己理解を深化させる機能もある。例えば、自分の将来を語れない学生には繰り返し、将来を語る機会を設けることによって大学の学びと自分の生き方をつなぐ場になるのではないか。自らが得た教養や専門的知識を繰り返し言語化することによってそれらが統合化されることが期待できるだろう。

言語に関わる教養教育への取り組みとしては、次の2 点にまとめられる。コミュニケーションツールとしての言語についてはどの授業・部所でも、正しい言葉の使い方を意識できる機会を積極的に設けていくこと。コミュニケーションの入り口であるあいさつから教職員側が積極的に取り組みたい。教養としての言語では、自己理解の深化を主たる狙いとし、おぼろげな自分を言語で具体化することに取り組み、言語を扱う意味や価値を実感できる授業の取り組みを目指したい。

第 6 班　　歴史的教養について　　*theme*

まずは、大学で学んでいる教養科目としての『歴史』について議論した。

高校までの『歴史』は受験科目の 1 つとして教育させる傾向にあるが、大学では事象や結果だけを学ぶのではなく、社会背景や人類の努力の過程を学んでほしいという意見が出た。確かに、歴史を学ぶことは、その時代背景の中でその世代の経験則を知ること、それにより次世代の判断基準がつくられていくことを学ぶことである。学生とっては将来の仕事や生きるための判断基準を得るヒントとなるものであり、成長の糧になるということを共通認識した。また、科学史を学ぶことは、人類の発展と苦難の歴史を学ぶことであり、人間として生きる意味を考えることにつながる。畿央生にはぜひとも「自然科学の歴史」を学ばせたいという事でも合意した。

では、教養科目としての『歴史』に関する単位の開講状況はというと、現時点では、健康科学部の『大和の歴史』と教育学部の『科学の歴史』のみである。科学史を学ぶことは、人類の発展と苦難の歴史を学ぶことであり、人間として生きる意味を考えることにつながるので、畿央生にはぜひとも「自然科学の歴史」を学ばせたいという事で意見が一致した。

最後に、具体的な方法について議論した。

教養としての歴史は、専門的なことを学ぶ前の低学年時に学ぶ機会が必要である。歴史の講義内容を必ずしも学生が全て理解できなくても、それが以後、自分で学ぶことにつながるのではないか、との意見が出た。また、過去の経験則をもとに自分が社会に出て新しいことを始めたいと考えた場合、どのように展開し発展させていくかというような授業があってもよいのではないか、との意見も出た。これを実現するためには現時点での単位設定では不足している。そのため、各教員が専門科目の導入で用いている各専門分野の歴史領域の講義では『学問とは…』『歴史とは…』という部分を大事にし、歴史全般を網羅するより、ポイントを絞りその時代背景の中での歴史の表と裏、プラス面とマイナス面など、人間的な矛盾などを掘り下げて教えるべきであろう、ということになった。また、『歴史』への興味 and/or 導入のために、グレートブックスとの出会いが重要であろうと思う。例として、『歴史とは何か』（E.H.カー）、『坂の上の雲』（司馬遼太郎）などがあがった。

資料　**本学における教養教育のあり方**

―学生に身に付けさせたい教養とは何か―　　教育学部長　白石　裕

はじめに

「教養」とはなにか[1]

Ⅰ　わが国における教養教育の変遷

1　戦前期における教養教育

（1）旧制大学と旧制高等学校―ドイツの制度を導入

〇帝国大学は「国家の枢要の人材を育成し、学術の蘊奥を究める」ことを目的。

〇学問の府・研究の場としての大学

〇旧制高等学校[2]は教養教育機関。

・高等学校の目的―「男子ノ高等普通教育ヲ完成スルヲ以テ目的トシ特ニ国民道徳ノ充実ニ力（つと）ムヘキモノトス」（高等学校令）。

・外国語と教養科目を重視。学科は文科と理科とから成り、旧制中学校の学科目に対応させ、文科にも理科系の学科目を、理科にも文科系の学科を配列して履修させた。

（2）師範学校―教養教育は？

狭義には 1943（昭和 18）年までは公立で中等学校程度の学校であり、その時点で官立の専門学校程度の学校となった初等学校教員養成機関を指す。広義には明治初期の官立師範学校や教員伝習所等、1886（明治 19）年以降の高等師範学校等の教員養成機関を含む。ここでは尋常師範学校についてのみ説明する[3]。

1）師範学校の特色

①師範教育の目標として順良・信愛・威重の３気質を掲げて、独特な師範教育の体制をつくりだしたこと。

②学科目は、倫理、教育、国語、漢文、英語、数学、簿記、地理歴史、博物、物理化学、農業手工、家事、習字図画、音楽、体操。とくに男子体操には毎週６時間を課し兵式体操を重視。

③入学資格は、高等小学校卒業以上の学力を有し年齢 17 歳以上 20 歳以下の者として修業年限は４年として、中等学校程度の教育機関とした。

④無月謝、給費制であり、給費は食物、被服、日用品などほぼ日常生活に関わる一切の費用に対して手当て支給。その代償として 10 年の教職服務義務づけられた。

⑤全寮制によって起床から就寝までを合図によって統制される生活全体を通じての教育が行われた。

2）師範教育批判

・師範型教員―自由の喪失、形式主義、画一主義、型にはまった人間。

・師範教育―教授内容等について厳密な規定とその順守。知識・技術の習得が中心で自由に、深く考察するという教育がない。師範学校生徒の創造的能力を引き出すような教育をしていない。教授法において児童の天賦の才

---

[1] 教養とは、人間の精神を豊かにし、高等円満な人格を養い育てていく努力、およびその成果を指す。とかく専門的な知識や特定の職業に限定されやすいわれわれの精神を、広く学問、芸術、宗教などに接して全面的に発達させ、全体的、調和的人間になることが教養人間の理想である。教養はとくに専門的、職業的知識を意識した場合、「一般教養」と表現されることがある。ギリシャでは精神と肉体が調和した全人的教養人が理想され、そのために学ぶべき知識が学科目として提示され、それがやがて自由七科（文法、修辞学、弁証法、算術、幾何、天文学、音楽）へと発展、継承されていった（Encyclopedia Nipponica 2001）。

[2] 旧制高等学校は、少数の選抜された生徒に帝国大学への進学を保証し、将来社会の指導者になる道を開こうとするエリート校であったが、他方では、恵まれた学校生活のなかで、教師と生徒間、生徒同士の間の緊密は人間関係に支えられ、個性豊かな、しかも幅広い教養を身につけた人間が形成されたといわれる（同 Encyclopedia）。

[3] 『新教育学大事典』第一法規、平成２年７月

能を発見し、自発性を育成するという点への視点がないなど。

師範教育についての第一次アメリカ教育使節団報告書（以下）の指摘と勧告―「師範学校は、より優れた専門職的養成教育とよりふさわしい自由教育を提供するために、より高度のレベルに再編成されるべきである。すなわち、師範学校は、教師の養成教育のためのより高度の学校あるいは単科大学とすべきである。……カリキュラムは、未来の教師を、個人として、また市民として教育するように作成されるべきであるから、たとえば自然科学、社会科学、人文科学、美術となった自由学科的な側面も強調される必要がある」。

２　戦後当初における教養教育

（１）アメリカ教育使節団報告書の勧告[4]と戦後大学制度改革

・高等教育機関を多数者のための機関とするために、旧制高等学校、専門学校、師範学校を大学に昇格。旧制高等学校を教養課程に編入→他の新制大学もそれに倣い、教養課程を新設。ドイツ型（人格的教養）からアメリカ型〈市民的教養〉への転換。

・一般教育[5]の意義と設置

「日本の高等教育機関のカリキュラムについて、大部分は一般教育に対する機会があまりに少なく、専門化があまりにも早く、あまりにも狭く行われ、そして、職業教育にあまりに力を入れすぎているということである。自由な考え方へのバックグラウンドと、職業的訓練の下地としてのより良い基礎を与えるために、もっと広い人文主義的態度が養われなければならない。これが、学生の将来の生活をより豊かにするであろうし、また彼をして自分の職業が人間社会全体の中でどう適合していくかを知らしめることになるのである。

一般教育は、正規のカリキュラムの中に統合されるべきだと思う。そうすれば、学生は、それで充分な単位を取得でき、それを何か付け足しの、他とは切り離されたものというようには考えない。

物理学や生物学もまた、明らかに重要なものであるが、学問それ自身のためだけにではなく、日本の復興に必要な技術や職業の根本的な基礎としてもそうなのである。しかしながら、教育においては、科学的成果よりも、むしろ科学的性格のほうが、国民の福祉のためにより重要である。こうした科学的性格は、証拠の前には謙虚さを、事実を蓄積する労苦の前には忍耐を、そして発見した物を分かち合い、科学のこの内的精神の技術的成果を普遍的な利用に移すにあたっては、協調の精神を要求するのである。

自然科学の健全な研究に必要な、事実に基づいた正確な思考は、他の知識の分野での研究にも用いられなければならない。

社会科学の分野においては、こうした客観性は特に望ましいものである。社会科学における学問的業績は、戦時下においては政府によって歪曲され、弾圧を受けたものもあった。社会科学は、現在われわれの日本人同僚が認識しているように、自由な研究と思想の精神の中で、いまこそ復活させられなければならない。社会科学の分野ではとくに、日本は、過去 20 年以上にわたって失われていた多くのものについてその埋め合わせをする必要がある」（『第一次アメリカ教育使節団報告書』）[6]。

---

[4] アメリカ教育使節団は、第二次世界大戦後、占領下日本の教育再建のため、連合国最高司令部(GHQ)の要請に基づいて、アメリカ政府から派遣された使節団。第一次教育使節団は 1946（昭和 21）年３月、第二次教育使節団は 50 年８月にそれぞれ来日した。第一次教育使節団報告書は、「教師の最善の能力は、自由の空気のなかにおいてのみ十分に現される。この空気をつくりだすことが行政官の仕事なのであって、その反対の空気をつくることではない。子どものもつ計り知れない資質は、自由主義という陽光の下においてのみ豊かな実を結ぶものである。」（序論）と述べ、アメリカ自由主義の教育理念を中心に据え、教育近代化の諸提案を行った（同 Encyclopedia）。

[5] 一般教育とは、職業人や専門家の基盤にある人間存在そのものの発達にかかわる教育であって、特殊な能力の開発をねらう職業教育ないし専門教育とは違って、共通の人間性の開発をねらう教育である。わが国で一般教育の名称が公的に登場したのは、第二次大戦後の新制大学の発足に際してであった。新制大学は、戦前のヨーロッパ大陸型からアメリカ型に変わったため、大学が専門教育だけでなく、それと並んで一般教育を実施しなければならなくなった。大学における一般教育の登場とその意義は、各専門分野の過度の細分化にかかわる。学問の細分化は学問領域の相互関係と実践的適用を犠牲にしがちで、学生が知識を人間行動ないし人間の生き方に関係づけることを困難にしてきて、人間教育の中核が失われていった。そのため、専門を超えた広い理解の共有を回復することにより、学生が各自の専門の克服を学び、自由な展望を生み出すことを目指すところにある（『新教育学大事典』、前掲）。

[6] 村井実全訳解説『アメリカ教育使節団報告書』講談社学術文庫、昭和 62 年７月。

（2）一般教育科目の位置づけと教養課程

・大学設置基準（旧）では、卒業要件として、一般教育科目については、人文、社会、自然の３分野にわたり 36 単位、外国語科目については、２つの外国語科目 16 単位を必修とした。また大学入学後２年間は教養課程に属するものとした。

Ⅱ　大学設置基準の大綱化とその後の教養教育のあり方についての審議会答申

１　大学審議会（1987 年 9 月～2000 年 12 月）の「大学教育の改善について」（答申・1991 年２月）＝大学設置基準の大綱化を提言（以下、下線部は白石）

→　一般教育と専門教育の区分、一般教育内の科目区分（人文・社会・自然）、外国語・保健体育を廃止し、各大学は４年間の学部教育を自由に編成できるようになった。

ただし、教養教育についてはその重要性を指摘→「教育課程の編成に当たっては、（各大学は）学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養、総合的な判断力を身に付けさせ、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮すること」。

↓　その結果、教養教育軽視、もしくは解体をもたらす。

「新制大学における初めての大きな改革により、とくに一般教育と専門教育の区分廃止のもたらした影響は大きく、一般教育課程ないし教養部の改組・解体が多くの大学で進行した。そして、設置基準大綱化の５年後には国立大学の教養部・一般教育課程はほぼ姿を消した。大綱化以降の大学教育改革は、専門教育を中心とした学部教育の編成へと進み、結果として教養教育が軽視される風潮を生んだ。しかし、それは大学審議会が期待していたものとは全く異なるものであった」[7]。

↓　そこで

２　大学審議会の「高等教育の一層の改善について」（答申・1997 年 12 月 18 日）

→「教養教育は高等教育全体の大きな柱であり、全教員の責任において担うべきものであるとの認識を徹底することが必要である。……その際、まず第一に教養教育によって学生にどのような知識あるいは能力を身に付けさせるのか、その目的を明確にすることが必要である。……たとえば、ある外国語文献を教材とする授業を行う場合、外国語を言語として修得することが目的なのか、文献から読みとれるその国の現状や思想を学ぶことが目的なのかといった点を明確にし、その目的に適した方法で授業を行うなど、明確な目的意識と適切な方法による教養教育を実施することが必要である。……また、それぞれの学問分野は、細分化・専門化の度合いを強める傾向にある一方で、学際的なアプローチによる研究の重要性が高まっていることから、関連する分野に関する幅広い教育が求められる。このため、学部・学科の壁を越えた共通授業科目の開設、異なる分野の学生同士や学生と教員が教育研究について交流できる場の工夫なども必要である」。

↓　さらに

３　大学審議会の「21 世紀の大学像と今後の改革方策」（答申・1998 年 10 月）→「教養教育が軽視されているのではないかの危惧がある。」「学部教育では、教養教育及び専門分野の基礎・基本を重視し専門的素養のある人材として活躍できる基礎的能力等を培うこと、専門性の一層の向上は大学院で行うことを基本として考えていくことが重要となる。」

↓　またさらに

４　大学審議会の「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」（答申・2000 年 11 月 22 日）→「平成３年（1991 年）の大学設置基準等の大綱化以来、多くの大学でカリキュラム改革が進んでいるにもかかわらず、教養教育の取り扱い方についての学内の議論が十分でなく、教養教育が軽視されているのではないか、あるいは、このような状況と進学率の上昇に伴う学生の能力や適性の多様化などが相まって、大学生と大学卒業者の教養の低下が進んでいるのではないかとの危惧がある」、「グローバル化が進展する中では、世界を舞台にして

---

[7] 林正人「大学設置基準大綱後の共通（教養）教育のかかえる問題＊１、http://www.jc.oit.ac.jp/japanese/toshokan/tosho/kiyou/jinshahen/48-2/jin-sha_2/hayas... 2010/09/12 にアクセス。

活躍し社会で指導的な役割を果たす、深い教養と高度な専門性に裏付けられた知的リーダーシップを有する人材が求められる」、「新しい時代の教養とは何かを問い直し、これを重視する方向で学部教育の見直しを検討することが望まれる」。

５　中央教育審議会の「新しい時代における教養教育の在り方について」（2000 年１月）の答申
○教養とは、個人が社会とかかわり、経験を積み、体系的な知識や知恵を獲得する過程で身に付ける、ものの見方、考え方、価値観の総体ということができる。
○教養は、知的な側面のみならず、規範意識と倫理性、感性と美意識、主体的に行動する力、バランス感覚、体力や精神力などを含めた総体的な概念としてとらえるべきものである。
○新しい時代に求められる教養→「変化の激しい社会にあって、地球規模の視野、歴史的な視点、多元的な視点で物事を考え、未知の事態や新しい状況に的確に対応していく力」。
○大学における教養教育の課題→①各大学は、理系・文系、人文科学、社会科学、自然科学といった従来の縦割りの学問分野による知識伝達型の教育や、専門教育へのたんなる入門教育ではなく、専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察、現実を正しく理解する力の涵養など、新しい時代に求められる教養教育の制度設計に全力で取り組む必要がある。②教養教育に対するすべての教員の意識改革。③各大学においては、「大学教育には教養教育の抜本的充実が不可避であり、質の高い教育を提供できない大学は将来的に淘汰されざるをえない」という覚悟で、教養教育の再構築に取り組む必要がある。
○この世代の青年が、部活動やサークル活動などを通じて協調性や指導力などの資質を磨くこと、各種のメディアや情報を正しく用いて現実を理解する力を身に付けること、国内外のボランティア活動、インターンシップなどの職業体験、さらには留学や長期旅行などを通じて、自己と社会とのかかわりについて考えを深めることも教養を培う上で重要である。
○教養教育を改善する具体的方策→①カリキュラム改革、指導方法の改善、②責任ある実施・運営体制の整備、③学生の社会や異文化との交流の促進

６　中央教育審議会の「我が国の高等教育の将来像」（答申・2005 年１月）→「活力ある社会が持続的に発展していくためには、専攻分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養を身に付け、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材、すなわち「21 世紀型市民」を多数育成していかねばならない」。

Ⅲ　教養教育の基本的意義と現代型教養教育の内容

１　教養教育の基本的意義
　ヒューマニズム、インテリジェンス、ソシャリティの涵養
「リベラル・アーツの目的は……個人がおのおのの選択するキャリアに入る前に、そのキャリアに可能な限りの知性、精神的能力、判断力、そして徳性をもたらすことができるように、知的・精神的な力に目覚めさせ陶冶させることになる。……ジェームズ・ステュアート・ミルは述べた。『人々が法律家や医者や製造業者になる前に、まず人間なのであり、もし我々が彼らを有能で分別のある人間に育てるならば、彼らを有能な法律家や医者にすることができる』。……我々の目的は男女の学生をたんに知的な追求だけではなく、人生のための準備を施すことにある」（イェール大学グリズワルド総長の言葉）[8]。

２　現代に求められる教養教育の内容
　―上記中教審答申「新しい時代における教養教育の在り方について」を参考に―

[8] 麻田貞雄『リベラル・アーツへの道』晃洋書房、2008 年。

① 普遍的教養
人間や社会についての知識、思考力、洞察力。
② 現代課題解決型教養
現代社会への対応力。
例。OECD の「キー・コンピテンシー」概念（国際化と高度情報化の進行とともに、多様性が増した複雑な社会に適合することが要求される能力概念）
・「社会的に異質な集団で共に活動できる力」
・「自律的に活動できる力」
・「対話の方法として道具を活用できる力」
③ 修養的教養
倫理的道徳的素養

Ⅳ 本学における教養教育をどうするか

1 教養教育の意味づけと位置づけ
建学の精神（「徳をのばし、知をみがき、美をつくる」）を基本とした教養教育

2 本学学生に身に付けさせたい教養とカリキュラム編成
（1） 学生に身に付けさせたい教養
・普遍的教養
・現代課題解決型教養
・修養的教養
（2）中心となるカリキュラム
・哲学・思想→人間・社会とは何か、どうあるべきかを考える。
「人は生きるために哲学を要するのである。…哲学は我々の自己の矛盾より始まるのである。哲学の動機は『驚き』ではなくして深い人生の悲哀でなければならない」（西田幾太郎『純粋経験に関する断章』）[9]
・法学→法の理念（自由、平等、正義）や法システムのあり方を考える。
・経済学→人々の幸福と経済システムのあり方を考える。
・文化・芸術論・身体論→人々の創造的活動と美の創造について考える。
・外国語→原書購読による言語能力の育成と著者自身の思想に直接触れる。
・科学史→科学の歴史を科学者による発見・創造と科学技術の発展の面からとらえ
科学とはなにかについて考える。
（3）教育・学習形態をどうするか
・上記のカリキュラムを「徳・知・美」の内容によって再構成し、一定の科目については必修とする。
・カリキュラムの内容をインターンシップ、ボランティア活動などの実践活動により
体験させ、身に付けさせる。

3 実施・運営体制をどうするか
・教養教育担当者会議の設置
・各教員が交代で教養教育を担当

[9] 小島憲道「大学におけるリベラル・アーツ教育の過去・現在・未来」学士会報 No.882(2010-Ⅲ)。

研究授業のご案内

2010 年度後期の研究授業が開催されます。積極的なご参加をお願いします。

●教育学部

科目：「運動の科学」（辰巳智則先生）
日時：12 月 7 日（火）　5限
教室：KB04

●健康栄養学科

科目：「食文化論」（岩城啓子先生）
日時：12 月 8 日（水）　1限
教室：L103

●理学療法学科

科目：「代謝系理学療法学」（松本大輔先生）
日時：12 月 10 日（金）　2限
教室：L102

●人間環境デザイン学科

科目：「人間工学」（東実千代先生）
日時：12 月 15 日（水）　3限
教室：E101
授業研究会：12 月 17 日（金）16:30～

●看護医療学科（実習で時期が遅れます）

科目：「小児看護学援助論Ⅰ」（弓場紀子先生）
日時：1 月 27 日（木）　2限
教室：KB01

画像は圧縮して軽快に!

情報センターより

教材のファイルをメールに添付したら送れなかったというようなことはなかったでしょうか。

迷惑メールを防止するために、メールの送受信サーバの入り口には大きなサイズのメールを拒否するなどの機能が設置されています。添付ファイルを作成する際、デジカメやスキャナーで撮った画像ファイルをそのまま貼り付けると、ファイルサイズはあっという間に 10MB～20MBにもなって、メールトラブルになります。

メールトラブルを防止するには添付ファイルに貼り付ける画像ファイルのサイズを小さくすることが有効です。サイズダウンによって画質は劣化しますが、PowerPoint のプレゼンテーションに使用するには十分です。

＜画像ファイルをサイズダウンする方法＞

1.Picture Manager を起動します。
　スタート／すべてのプログラム／ Microsoft Office ／ Microsoft Office ツール／ Microsoft Office Picture Manager
2. 元画像のあるフォルダを「画像のショートカット」に追加します。
3. 画像を選択し、画像のエクスポートを選択します。
4. ファイル名、エクスポートするサイズ（6 段階ある）を設定し、OKします。
5. 縮小されたファイルが元画像と同じフォルダに作成されます。

※Picture Manager では、画像の明るさやコントラストなどかなり微妙な編集も可能です。

また、Microsoft Office の各ソフトでは、画像をクリックすると図ツールメニューが表示されますが、この左上部にある「図の圧縮」を使うと、作成したファイルのすべての画像・図のサイズダウンを一気に行うことができます。

重いファイルは、メールだけでなく、学内のネットワークでも負荷を高めることとなります。ＰＣやネットワークの速度が速くなったとはいえ、情報システムをより軽快に活用していくための「エチケット」のような感覚でご理解いただけたらと思います。